2004.3月1日 Vol.6

環境まちづくり会報

編集・発行／入間市環境まちづくり会議

第二回 環境ウォーキング開催

〝まちを歩いて 入間を知る〟「五感を使って環境チェック！」をテーマに、入間市環境まちづくり会議主催で、霞川をきれいにする会が共催した「第二回環境ウォーキング」が、昨年11月22日(土)、一般市民73名、役員・事務局27名、合計100名が参加して行われた。

五感を使って環境チェック

ウォーキングは、①老人福祉センターやまゆり荘を出発する「不老川上流コース」(約5・5㎞)、②武道館を出発する「入間川・霞川下流コース」(約5㎞)、③農村環境改善センターを出発する「霞川上流コース」(約5・5㎞)、④藤沢公民館を出発する「不老川下流まちなかコース」(約4㎞)、⑤文化創造アトリエ・アミーゴを出発する「加治丘陵コース」(約5・5㎞)の5コースに分かれ、目的地の愛宕公園・をめざした。

それぞれの出発点に朝9時に集合し、歩くには最適な晩秋の晴天に恵まれた当日、参加者それぞれが「五感を使った環境通信簿」のチェックシートを手に、ポイントごとにそれぞれの判断で環境診断を行った。各コースの川辺や丘陵の自然、水質、ゴミ、街並みや緑、道路状況などを見ながら環境チェックをして歩いた。

▲ゴールの愛宕公園

正午までには参加者全員がゴールの愛宕公園に到着し、入間市環境まちづくり会議の岡内会長、霞川をきれいにする会の横田会長、来賓の木下市長の挨拶のあと、各コースの担当者からコースごとの感想が話され、芋煮担当者の佐藤さんより食材の説明があった。その後、歩いたあとの汗をぬぐいながら、入間特産の里芋を使った芋煮に舌鼓を打って秋の味を楽しみ、各コースで見つけた環境の様子について情報交換するなど、様々な話で盛り上った。

環境通信簿は、各コースのポイントを5カ所（うち3カ所は全員共通で、2カ所は参加者が自由に選ぶ）を選定し、参加者の五感で5～1（とてもよい～とても悪い）までの5段階評価を行うとともに、「診断結果」とどうしたらもっと成績が上がるかの「処方箋」を書いてもらった。参加者の48％の方から環境通信簿が提出された。コースごとの診断結果は表(四面)のとおりで、一部成績の悪いところもあるが、概して成績はまあまあよいという診断結果になった。

▼芋煮担当

成績が悪いところはゴミの散乱や生活排水の流入で水質が問題な点、改善のための処方箋としてはパトロールや啓発活動、定期的な清掃活動など。成績の良いところは里山や水辺の自然が豊かなこと、茶畑や屋敷林などの田園風景の良い所などがポイントとしてあげられ、こうした環境を市民みんなで守るとともに、川辺や丘陵の自然に近づけるアクセスの改善や遊歩道の整備などがあげられた。

今後も、健康と楽しみを倍加する中で環境ウォーキングをつづけて、広く市民の間に地元入間の環境への関心を高め、入間市の良好な環境維持と改善に努めていきたい。

〈文 木内勝司〉

▼不老川上流コース

不老川上流コース

初冬の晴れ渡った朝風のなか、やまゆり荘の玄関先をおかりして始めに役員の責任分担とコースなどの確認や情報交換を行いました。そして三々五々集まる参加者の出欠点検、会費徴収と体調確認をしました。

高野区長会長などからあいさつをいただき、参加のお礼、環境まちづくり会議や五感を使って環境チェックや環境通信簿の説明、別紙コース案内（ポイント・トイレ）の後、ラジオ体操を行い出発しました。

第1ポイントの大森調節池ではあの有名なカエルのトンネルの説明や大森池まつりの取り組みを埼玉県生態系保護協会の日比章子さんからいただきました。

不老川からはけをのぼり第2ポイントの健康福祉センターでは、ビオトープや屋上緑化など環境共生建築としての取り組みをセンターの宮岡隆氏にしていただきました。

そして、六地蔵では藤沢の歴史を学習し、第3ポイントのジャスコでは副支店長から、周辺緑化の植樹祭の取り組みについて紹介を受けました。

そして扇台に点在する公園を縫うようにゴールに向かうなか、久保稲荷神社の近くの公園では太極拳のグループが練習をしていました。こうした取り組みの実践が地域コミュニティー形成では重要だと感じました。

最後に郵便局脇の住宅展示場をぬけて全員が完歩してゴールに到着しました。

〈文　池田真幸〉

入間川・霞川コース

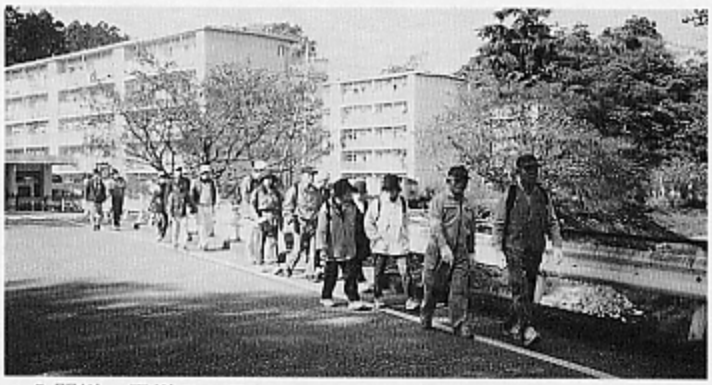
入間市武道館に集合し、秋津川（子どもの頃よくエビや沢蟹を捕りに来た川だなぁ…）沿いを下り→鍵山浄水場→入間川笹井水源地（子どもの頃入間市釣り大会が行われたところだったなあ…）→入間川を下り、赤間用水路→霞川との合流地点→霞川を上流に上り豊高橋を通り、目的地である愛宕公園に至るコースを、子どもから大人までたくさんの市民とともにいろんなことを感じながら歩いた。

コースの8割は川沿いということもあり、水のきれいさ、水辺の草花の生態、そのまわりに生息する鳥や魚、虫たち、またところによっては不法投棄等のゴミの実態を、歩いた人すべての人が様々な思いを感じることができたと思う。また各チェックポイントでは、その場所の歴史や概要の説明に皆耳を傾けていた。特に、途中「霞川をきれいにする会」の人の話のなかで聞いた、川の流れの歴史や橋の名前の由来、また霞川をきれいにするための苦労や取り組みには大変関心を示していた。

一度壊した環境を元の姿に戻すには多くの人の努力や多くのお金がかかることを知ることもできた。

「環境問題」に取り組むには、まずは一人ひとりがまわりの自然を体感してもらうことがとても大切であると感じた一日だった。

〈文　内村忠久〉



▲入間川・霞川コース

霞川上流コース

このコースは市の中心部から離れているせいか、参加者が少なく合計7名でした。その分、和気あいあいとして密度の濃いウォーキングとなりました。

9時農村環境改善センターを出発、15分ほど歩いて大字花ノ木地区の霞川に到着。たくさんのコイとともに、カモやサギ類の出迎えを受けました。霞川はブロック護岸で固められた人工的河川ですが、澪筋は蛇行しており、それなりに瀬や淵、砂利川原や水際の湿性植物が繁茂しているところもあり、自然的な風情が感じられるところもあります。遠く桜山の展望台や加治丘陵の紅葉がきれいで、茶畑の風景も里地・里山の懐かしさが

▼霞川上流コース

あります。根岸の大六天橋は第一の環境調査ポイントで、めいめい環境診断、生活排水のにおいが気になりました。

新久親水公園は霞川の水辺からかなり高さがあって河川との境界のネットフェンスは残念です。川の水に触れられるように工夫して欲しいものです。新久の清水橋は第二の環境調査ポイントです。霞川にはオイカワの稚魚と思われる群れが見られ、コイ以外の魚は初めてです。ここからは左岸側を歩き、新久と小谷田の境にある境橋付近でもコサギが見られました。しばらく県道を歩き、小谷田の小谷田橋（桂橋）付近では、民家からの排水用のパイプが突き出していて、桜並木の景観が壊れて残念です。圏央道との交差点では、不法投棄の自動車が目立ちます。また、一二三橋上流の大きな排水管からの排水は白くにごっており、霞川の水質への影響が懸念されます。

東橋からはちょっと県道を歩き、国道299号の下をくぐって、川沿いの運動場から霞川を眺めました。このあたりはかつての霞川沿いの自然の風景の名残が見られ、なかなか良いところですが、住宅地のコンクリート擁壁は対照的で、緑化できたらとの意見がありました。和田橋の下流から左岸を歩きました。対岸のケアハウスマナに隣接した竹林と河川までおりられるなだらかな護岸は好評でした。高倉5丁目と扇町屋2丁目の境にある人道橋は、第三の環境調査ポイントです。ここまで下ってくる間にコイも相当大きくなりました。下流になるとなぜコイが大きくなるのでしょうか？おじいちゃんがお孫さんらしき子どもと手をつないで霞川を眺めている光景は、とても微笑ましく思えました。

〈文　木内勝司〉

不老川下流まちなかコース

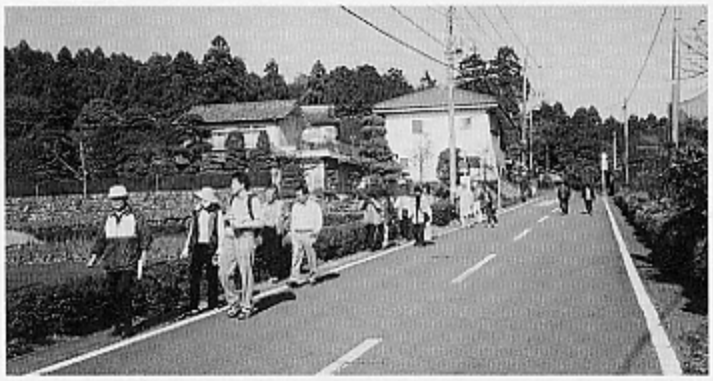
初めにコース設定は、楽にウォーキングできる距離と不動院、不老川、富士見公園、彩の森入間公園、東町小ビオトープ等環境を感じることの出来るコース設定で良かった。藤沢の地面から湧き出たような私に出来ることと考え、不動院とその周辺の説明、年越しの冬の期間に水が枯れて年を越さないことから年取らず川と名前が付き、それが後に不老川となったこと、そして40数年見続けている風景など話しをさせてもらった。出来るなら立ち止まって話をする位の時間と気持ちに余裕がないと、今自分が居る周りの環境を感じながらのウォーキングは無理なのではないかと思う。

富士見公園では落ち葉をファサファサと踏みながら歩くチャンスを自然が与えてくれ、何人かは気持ちよさそうにその感触を楽しみ話をしていたが、何人かは目的地に向って一直線という人もいたようだ。昨年度の話で恐縮だが、農業改善センターをゴールに、ゴミの袋を手に持ってただひたすら下を見て環境を感じることも無くゴミを拾い続けたことを考えると、今年の方が数段「環境ウォーキング」という点では大きな進歩があったと思う。東町小のビオトープも参加者が思ったよりも本気で聞き入っていたことには驚いたが、これは環境よりも子供に興味がある様にも思えた。これからのウォーキングには参加者の拡大と目的地からの帰りがやはり問題ではないだろうか。

〈文　鈴木洋明〉

▼不老川下流まちなかコース

▼加治丘陵コース



加治丘陵コース

文化創造アトリエ「アミーゴ」に集合、入間川の環境について観察し、9時に武田リーダーのもと総勢17人、5・5㎞完歩を目指し出発した。特記として異色のウォーカー「五十嵐文彦」衆議院議員の参加があった。

チェックポイント①から⑥について以下に「観察診断」「処方箋」を報告します。①の入間川での観察診断は「思ったより水が澄んでいる」「上流での混合林化・植栽が更に大切」②のグリーンロッジでは「未使用建物は傷みが早い」処方箋として「他目的に使用出来るように早急に考える必要あり」③の東金子小学校では学校ビオトープの見学説明を受け「工夫・努力の跡あり」④の青少年活動センターでは休憩をさせていただき観察をしたが「ゴミもなく自然の木々が美しい」等環境良好との診断⑤の圏央道横断場所については「一番の問題を感じた」「排ガス・ゴミ多し」「加治丘陵の生態系が分断されてしまっている」等の意見が多く、処方箋として「動物が渡れるトンネル等を作るべき」「雑木林の買い上げを」⑥の霞川・豊高橋では「桜の木の見事な並木」「家庭での水の汚れに注意しなければ」との意見があった。

以上概括報告しましたが、自然環境に恵まれたコースであり、少なくも現状の環境を保全しなければと体感したコースであり、後半やや歩行スピードがアップしたが予定通り12時に全員無事にゴール出来て、おいしい「芋煮」をいただくことが出来ました。

〈文　谷口秀男〉

■ビオトープって何？

ビオトープは、ギリシャ語に由来するビオ（生物）とトープ（空間）という二つの言葉がくっついたドイツ語で、野生の生物が生きて行くことのできる場所のことです。例えば、雑木林のビオトープ、ススキの原のビオトープ、湿地ビオトープなどいろいろなタイプがあります。残念なことに多くの方に誤解されて伝わり、池などを造成して人工的につくったところをビオトープと思っている方が大半です。これは人工ビオトープです。

本来のビオトープの意味は、自然にある野原や森林、河川など野生の生物がすんでいるところを指すものです。

誤解されて伝わったのには理由があるようです。スイス・ドイツなどドイツ語圏の国々では、高度産業経済が頂点に達した1970年代に、工業化が進んで生活が便利になったけれども、何か自分たちのめざす将来像と違うとごく普通の市民が気づき、自然環境を大切にする法制度を確立しました。その中で今までコンクリート化した河川や道路沿い、市街地の中に自然を呼び戻す試みをはじめました。一番早く自然が蘇り、野生の生物が戻ってくるのは、コンクリートをはがして土に戻し、池や湿地を造成することです。野生の湿性植物がすぐに繁茂し、トンボやカエル、小魚、たくさんの野鳥が戻ってきます。こうして、人工的につくった池や湿地がまち中にあふれるようになったそうです。こうした過程で、人工的につくった池や湿地のことをビオトープと思うようになったのではということです。もちろん、こうした人工ビオトープを造ることは都市環境を改善し、子ども達の環境教育に有効なことは間違いありませんが、もっと重要なことは残された自然のビオトープを守ること、自然のビオトープを再生していくことだと思います。つまり、森林、里地・里山、田んぼ、河川、海岸などの自然を大切にしていくことです。

「学校ビオトープ」は、教育的な効果を第一に考えて、狭い場所にさまざまなタイプのビオトープを人工的につくり、周辺の生き物を呼び込むものです。子ども達は学校ビオトープにかかわることで、四季折々の生物に体験学習の形で日常的にふれることができます。学校ビオトープは自然のものではなく、人工の教育施設として設置するものです。子ども達が自然のビオトープに興味を持つきっかけ作りを目的としており、人工的につくったものですので、人の手で一定の管理をしていかないと維持できません。学校ビオトープ造りは、地域の人たちや生徒が一緒になってつくることが望ましいものです。子ども達と一緒に考え、体験しながら見守っていってもらえばと期待しています。

〈文　木内勝司〉

表　第２回環境ウォーキング・五感を使った環境通信簿・診断結果の概要

コース名	診断ポイント	評価	診断結果	処方箋
①不老川上流	大森調節池	2～3	ゴミが多い	パトロール、定期的清掃
	健康福祉センター	5	良い環境で最高	利用の推進
	イオン入間店	4～5	緑の森づくりよし	
	途中の雑木林	2～3	ごみ、空き缶多い	パトロール、啓発活動
	まちなか	2～3	捨て看板がある	市民が撤去できる制度
	六地蔵	4	歴史	
	公園	4	宅地に公園が多い	
②入間川・霞川下流	サンクチュアリ	3～4	ゴミない、水きれい	
	笹井ダム	2～3	ゴミある、水きれい	定期的清掃
	霞川	3～5	ゴミ多少、水きれい	定期的清掃
	河原町	3～5	犬の糞	マナーの呼びかけ
	豊高橋	3		
	全体		自然多く、よい	
③霞川上流	大穴天橋	2～5	生活排水、野鳥	浄化の徹底、花木の植栽
	無名橋	4	桜並木、周辺景観	
	中島団付近	4	屋敷林	水辺への階段、遊歩道
	新久親水公園	3～5	川と公園の一体感	水辺へのアクセス、魚道
	清水橋	3	桜並木、小魚	水辺へのアクセス、魚道
	農協付近	1	流入排水が汚い	浄化
	国道16号付近	1	ゴミがすごい	
	霞川団地付近	2～5	自然川原、桜並木	遊歩道
	全体	2	魚道無、水質悪化	河川行政に市民の声を
④不老川下流まちなか	不老川	4～5	水きれい、カモいる	川沿いを歩きやすく
	富士見公園	4～5	ゴミない、きれい	現状維持
	東町小	5	ビオトープが楽しみ	見守りたい
⑤加治丘陵	アミーゴ・入間川	3～5	思ったよりきれい	川沿いに樹木を多く
	青少年活動センター	2～5	ゴミなく、自然よい	
	圏央道横断	1～3	丘陵分断、騒音ガス	動物が通る道等ネットワーク
	グリーンロッジ	3	ゴミ、建物の傷み	多目的利用の検討
	前堀川	1	水質悪い	水路改善
	東金子小	3～4	学校ビオトープ	もう少し自然の工夫
	霞川・豊高橋	2～4	鯉、鯉の餌やり、ゴミ、水質、桜並木	啓発

編・集・後・記

今回で二回目となりました《環境ウォーキング》初回はゴミを拾いながらのウォーキングでしたが今回は環境通信簿を片手に、自らが環境のお医者さんになって入間市の環境を診断する、ということで、さまざまな処方箋が出されました。そのころわたしはそんな皆さんがゴールを目指して楽しみにしている《芋煮》を作っていました。沢山の野菜を切り刻んで、ごぼうの灰汁で手を真っ黒にさせて……でもやっぱり埼玉の里芋は文句無くおいしいですね。そんなおいしい野菜がいつまでも採れるよう、環境にやさしい行動を心がけたいですね。

（二ノ宮）

■会員の皆さんの声を募集しています。

●会員数（平成16年１月現在）
432人

内訳	市民	183人
	事業者	172
	民間団体	50
	行政関係	27

入間市環境まちづくり会議

事務局：入間市役所環境経済部環境課
住　所：〒358-8511　入間市豊岡1丁目16番1号
TEL：04-2964-1111(内線1241.1243)
FAX：04-2965-0232
E-mail：kankyo@city.iruma.saitama.jp

大豆油インキ(SOY INK)を使用しています

R100 この広報紙は古紙配合率100％の再生紙を使用しています。